

僧副について

川島 常明

釈僧副の伝は『続高僧伝』巻十六の習禅篇の冒頭に存し、古来禅宗史書における皮肉骨髄の説の道副或は偏頭副と同人又は別人とする説があるが、先ずはじめに釈僧副自身の伝記の検討から始める。

釈僧副（四六四—五二四）は太原祁県（山西省）の出身で、「少い時から鑒徹群を絶し、師を尋ねて遊訪した」と伝え、山西省という出身地から考えて北地を歴遊していたことが知られる。次いで彼は達摩禅師に会う。達摩禅師は観行に通曉し巖穴に処してその思想が奥深かつたので、師に従って出家し、定学即ち禅に於て宗となり、斉の建武年間（四九四—四九八）に南行して建康に近い鍾山定林下寺に止つた。そしてこの地で梁の武帝の帰依を受けて開善寺に住し、その後蜀へ行き大いに禅法を弘め、久しくして建康に帰り、普通五年に没したと述べている。伝記中に簡単ではあるが興味ある一事件が記されている。それは天監十四年（五一五）に豫章（江西省）の胡翼山に神人が現れ、何規なる民に『慧印三昧経』を与え、南平王観の病の為に齋を行じ、その法が判らぬ時は副法師に問えと言ひ、果して彼が曾て行じた所の法で、これにより王の病が癒えたと言う。道宣のこの記述は『出三蔵記集』巻七の王僧孺撰「慧印三昧及濟方等学二経序讃」に拠つたものと考えられ、『続伝』よりも詳細に記されている。この経序の副法師については右の話以外に「戒行に励ん

で恬憍無為、欲をわすれて禅寂を怠ることがなかつた」と伝えるのみである。『続伝』には王の名を観と伝えるが、『梁高僧伝』巻十二の僧祐伝には「南平王偉……並崇其戒範」と述べ、同巻十三の僧護伝には「天監六年に陸威なる者が、僧護の製作途中の石像を成就すれば建安殿下の病が癒えたと夢見、そこで王は造像を僧祐律師に命じ、同十五年に像が完成し、ここに王の病が回復した。建安王は今の南平王である」と伝え、『梁書』巻二十二の南平元襄王偉（四七六—五三三）の伝と一致する。『梁書』には彼は太祖の第八子で天監元年に建安王に、同十七年に南平王に封ぜられている。また同七年に病に罹り、同十三年には病に冒される事烈しかったと伝え、また王は晚年仏理を崇信したと述べ、『経序』や『梁伝』の記事と一致し、『続伝』は南平王偉を誤り伝えたことが判明する。

それでは、『慧印三昧経』に関する説話の意味を考えると、仏教伝来当初に禅や三昧にする經典が主として翻訳され受容された経緯と考え合わせると、この経の性格も自ずと知られるであろう。この経は現存（大正十五卷所収）しており、そこにはこの慧印三昧を修すべき事とその功德が述べられている。伝記に「為病行齋三七日」と言うのは、此の経の「当於是経、昼夜勤力、作無上行、常樂精進、於三七日、奉行印経……」を承けたもので、この法を僧副が曾て行じたものであつたと言うのは、彼が禅法において當時名を知られており、深く通曉していたことを示すに他ならぬであろう。

僧副伝には先に触れた如く興味深い記事を述べる。「有心岷嶺観彼峨眉、会西昌侯蕭淵藻出鎮蜀郡、於即私衣附之爰至井絡、雖途經九折無忘三念、又以少好経籍、執卷減默動移晨晷、遂使庸蜀、佛法自此大行」と言うもので、西昌侯蕭淵藻（四八三—五四九）は、『梁

書』卷二十三に、天監元年に西昌侯に封ぜられ、年末だ弱冠ならざるに四川省の乱を平定して信威將軍と進号され、同九年には徵されて太子中庶子となつた人で、蜀を平定したのは五〇二―一九年の間の事で、僧副も従つて蜀に行き、大いに禪法を鼓吹したと推定される。

僧副は北地の出身で、達摩禪師に従つて弟子となつたのは、達摩が北魏の地にあつた時と推定され、『二入四行論』には「遂能遠涉山海、遊化漢魏」と述べ、漢魏は漢中及び魏州の地方であつて、達摩は西域を経て北魏に來たと推定され、『洛陽伽藍記』永寧寺の條に達摩は波斯國より來た西域沙門と言ひ如く、僧副が達摩の弟子であつた事と達摩が西域を経て漢魏に來た事の二事は真実に近いと考えよう。更に僧副が出合つた頃、達摩は一人岩穴にひそんで觀行を明らかにしていたという記事もこれを傍証するものであらう。

それでは禪宗史書に於て偏頭副或は道副が登場するのは『宝林伝』(八〇一)の記述が最初で、『歷代法宝記』(七七五―)が達摩の付法を慧可・道育・尼總持の髓骨肉の三弟子得法を言うののに対し、これに続く『宝林伝』においては血を得た偏頭副が加えられ、血肉骨髓の四人得法説に發展した。しかし、これに続く『内証仏法血脉譜』(八一九)『禪門師資承襲圖』(八四一)『祖堂集』(九五二)などは、『歷代法宝記』と同様三人得法説を採り、『景德伝灯録』(一〇〇四)に至つて、道副が皮を得たとして四人得法説が主張され、『宝林伝』の血肉骨髓がここに至つて皮肉骨髓とされ、問答の形を借りて四人夫々の得悟の内容まで説かれるに至り、その後の『伝法正宗記』(一〇六一)は『伝灯録』をそのまま踏襲している。達摩の伝衣付法説は『歷代法宝記』に三弟子得法という形をとるに始まり、『伝灯録』に至る迄の二百数十年間流動を続けていた事が知られ

る。この伝承を單なる虚構として捨て去るのではなく、この様な主張がなされた背景を考慮すべきである。皮肉骨髓の問題については既に関口真大氏の詳論があり、関説するには及ばないであらう。

最後に偏頭副が『宝林伝』に於て初めて登場した背景と理由について推論を試みたい。『宝林伝』の成立は、第二十七祖般若多羅の懺悔に窺われる如く南岳―馬祖の正宗たる事を主張し、曾ての『歷代法宝記』の伝衣説に代る伝法偈による伝統を説かんとするものであり、又禪宗そのものが仏教の正宗たる事を言わんとするものであつた。当時の禪宗界の動向を一覧すると、安史の乱(七五五―七六三)を境に唐の歴史と社会は一大変革を遂げ、神会の南宗顯彰運動を契機として牛頭宗と天台宗を刺激し宗派の形成に及び、乱前後の唐室と密接な關係にあつた四川仏教即ち保唐系の禪が大いに發展し、無相―無住の保唐派の禪を主張したのが『歷代法宝記』であり、古來四川省の地は異色ある人物を生み出した革新派の拠点であつた『歷代法宝記』は劍南派の中でも智詵―処寂―無相―無住の伝統を主張するが、他に処寂―馬祖、処寂―無相―神会などの系統があつた。『宝林伝』が南岳や馬祖の系統と密接な關係にあつた事は先に述べた如くであり、馬祖は後に發展する洪州宗の祖とされるのではあるが、元來四川の出身であり、処寂又は無相に学んだ人であつたところに、達摩の得法者としての偏頭副が『宝林伝』に登場したと考えられるのではなからうか。つまり『宝林伝』が出現した当時、四川の系統の禪が大いに發展していたという背景において、北魏の地で達摩禪師に学び、その後梁の建康に化を布き、また蜀にも禪法を鼓吹したという釈僧副に着目し、偏頭副として再び禪宗史書たる『宝林伝』に登場せしめられたと推定できるであらう。